

大学院ガイド

2025



Showa
Pharmaceutical
University

沿革と現況

本学は、昭和44(1969)年に旧4年制課程の薬学部（以下、旧4年制薬学部）を基礎とした高度な薬剤師養成を目指して大学院薬学研究科薬学専攻修士課程を設置し、高等教育機関としての歩みを始めました。薬学の教育・研究の発展に伴い、平成2(1990)年に東京都世田谷区から町田市にキャンパスを移転し、薬科大学として最高水準の教育研究施設を整備し今日に至っています。

平成3(1991)年に大学院薬学研究科を改組し、博士課程（前期2年の課程（修士課程）及び後期3年の課程）を設置し、研究者養成のための高等教育機関として体制を充実させました。さらに、医療の場におけるチーム医療の一員として高度な専門性を発揮できる薬剤師を養成するために、平成10(1998)年大学院薬学研究科医療薬学専攻修士課程を併設しました。関連病院を含めた協力体制を構築し、医療薬学専攻修士課程の学生に対して、医療人としての薬剤師の養成に不可欠な臨床実習の場の確保を行いました。

国際交流を図るために、平成17(2005)年に米国南カリフォルニア大学(USC)薬学部との学術協定を締結しました。その後、USCからの招聘教授による講義を開講するとともに本学大学院学生の短期留学研修を行い、臨床教育研究体制を強化してきました。

研究活動の高度化を図るために、平成19(2007)年、ハイテクリサーチセンターを立ち上げ、大学院学生の研究指導の向上にも活用しています。

4年制薬学部を基礎とする大学院薬学研究科修士課程（薬学専攻及び医療薬学専攻、標準修業年限2年）の廃止を決定（平成23年3月最終学年の学生の修了を持って終了）し、新たに平成22年4月より、大学院薬学研究科に基礎とする学部を持たない薬科学専攻修士課程（標準修業年限2年）を開設しました。さらに、薬学研究科薬学専攻博士課程（後期3年の課程）を改組し、6年制薬学部を基礎とする大学院薬学研究科薬学専攻博士課程（標準修業年限4年）を平成24年度より開始しました。

理念・目的

本学は、「薬を通して人類に貢献」を理念としています。本学の大学院薬学研究科は、学校教育法及び大学院設置基準に則り、大学院学則に定めるように「学部の教育の基礎の上に、薬学における高度な学術の理論及び応用を教授研究し、その深奥をきわめて、文化の進展に寄与する」ことを目的としています。大学院薬学研究科博士課程においては、大学院設置基準に則り、先端科学の基礎及び応用研究を通して、目らが意欲的かつ創造性豊かに研究を遂行し、科学を発展させる能力を有する人材の育成を教育目標としています。すなわち、創造性豊かな優れた研究・開発能力を持つ研究者等の養成を目指しています。また、高度な専門知識・能力を持つ高度専門職としての薬剤師の養成を目指します。博士課程で総合的薬学専門能力を強化することによって優れた人材を輩出し、高度な知識・技能を有する薬剤師及び研究者の職能の拡大及び高度化を図ります。さらに、教育能力と研究能力を兼ね備えて将来の本学を担う教員の養成も視野に入れています。

6年制薬学部を卒業後、博士課程を修了した人材は、医療の場での教育を受けた後に総合的薬学専門能力を備えており、製薬産業においては医薬品開発（創薬や育薬）に携わる科学者・技術者として他の理系学部卒業生や大学院修了者に比較し一段と社会のニーズにあった活躍が期待されています。また、医療機関等では、チーム医療の高度専門職として薬物療法、感染制御等の活動が期待され、医療のニーズに合致すると考えられます。薬科学専攻修士課程は、広い分野で創薬研究を推進できる研究者を育成するために、薬学部以外の卒業生をも受け入れています。大学院薬学研究科は、大学院設置基準に定める内容を遵守してカリキュラムを組み、学部教育の基礎の上に、薬学における高度な学術理論および応用について研究、知識修得に勤め、研究能力が卓越した社会で活躍できる優れた人材を養成します。

本学の学部卒業生及び大学院修士課程修了生のほか、広く他大学の学部卒業生及び修士修了生を受け入れます。なお、社会人大学院学生の受け入れもしています。

令和7年度 大学院薬学研究科 入学試験

(1) 日程

【修士課程】

種別	願書受付期間	試験日	合格発表日
一般入試(1期)	令和6年9月9日(月)～9月27日(金)	令和6年10月11日(金)	令和6年10月18日(金)
一般入試(2期) 社会人推薦	令和7年1月27日(月)～2月12日(水)	令和7年3月4日(火)	令和7年3月6日(木)

【博士課程】

種別	願書受付期間	試験日	合格発表日
社会人推薦(1期)	令和6年6月20日(木)～7月2日(火)	令和6年7月18日(木)	令和6年7月22日(月)
一般入試(1期)	令和6年9月9日(月)～9月27日(金)	令和6年10月11日(金)	令和6年10月18日(金)
一般入試(2期) 社会人推薦(2期)	令和7年1月27日(月)～2月12日(水)	令和7年3月4日(火)	令和7年3月6日(木)

(2) 試験科目

【修士課程】

社会人推薦: 学力試験(英語)、面接

一般入試: 学力試験(英語と専門科目(1科目選択))および面接

【博士課程】

社会人推薦: 学力試験(英語)、面接

一般入試: 学力試験(英語と専門科目(1科目選択))および面接

※英語: 一般英語と専門英語
(化学系、生物系、医療系から1つ選択)
※専門科目については、学生募集要項
をご参照ください。
※面接は、卒業論文(修士論文・業務内容)
などのプレゼン含む(修士一般入試を除く)

大学院

6年制教育を基盤とする博士課程(4年制)と
独立大学院として修士課程(2年制)があります。

大学院の薬学研究科は、薬学専攻(博士課程)と
薬科学専攻(修士課程)で構成され

本学や他大学の卒業生、社会人、留学生など多様な人材が揃い
薬学の未来を担う先進的な研究活動に意欲的に取り組んでいます。

大学院生 インタビュー

自分自身で手を動かして考え、
模索する日々にはやりがいを感じます

大学院への進学は、ちょうど研究室見学が始まった頃、3年次の後期に漠然と考え始めました。もともと企業に就職して創薬に携わりたいという思いがありましたが、就職活動で企業の創薬研究を見るうちに、薬に直結する研究ではなく、前段階の基礎研究をしたいという思いが強くなりました。基礎研究は主にアカデミア(大学や公的研究機関における研究職)で行われるものですが、アカデミアで研究するには大学院の博士課程を取得する必要がありますということ、進学を決めました。

薬学部が一番の強みは、学べる分野が広いことです。大学入学前は、創薬研究という将来を見据えて医

学部や農学部も視野に入れていましたが、薬学部出身者のように臨床と研究の両面を知る研究者はあまりいません。どのような新薬の販売が始まっていてどのような患者さんが多いのかなど、臨床の面からも学べる点は強みではないでしょうか。

大学院では、新規合成法の開発と蛍光特性評価の研究を行なっています。学部時代は教授と相談しながら進めていましたが、今は自分で考え自分で進めていくようになり、主体性が増しました。自分自身が手を動かし、考え、結果を受けて次にどう繋げていくかを模索する日々は楽しく、やりがいを感じます。将来的には、大学で後進を育てながら、メカニズムの解明やそれを解明するためのツールの開発をしていきたいと考えています。



関根美夢さん
Miyu Sekine

薬学専攻博士課程
医薬分子化学研究室

臨床薬学と基礎科学に対応した4年制博士課程

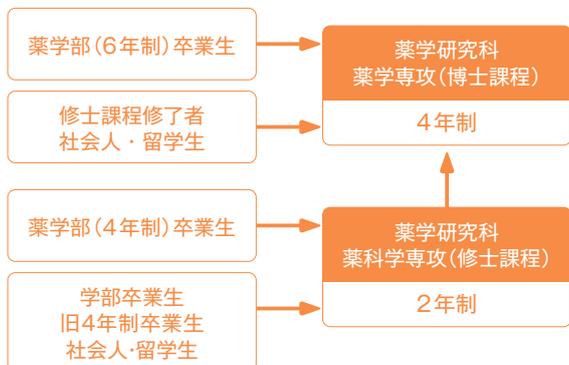
博士學位論文をまとめる特別研究に加え、専門履修科目(特論及び演習)を用意。複数の教員がオムニバス形式で指導する「先端薬学特論」「キャリアパス」「医療薬学ゼミナール1~3」が必修科目となり、臨床薬学と基礎科学を網羅した12の専門選択科目から4科目以上を履修します。現在は本学の卒業生が中心ですが、他大学の6年制薬学部や修士課程の修了者、病院・薬局や企業などで活躍する社会人(修士課程修了者)も積極的に受け入れており、授業時間帯に配慮するほか、e-learningによる聴講など働きながら進学できる環境整備に努めています。

主に創薬をめざす修士課程

薬科学専攻は、主に創薬研究に取り組み研究者養成を目的とし、本学や他大学の卒業生、社会人、留学生等に広く門戸を開いています。博士課程同様、特別研究のほかに基盤薬科学、創薬科学の講義・演習を履修します。

対象者

大学院組織



薬学専攻(博士課程)修了者の進路

- 医療職(博士号をもつ薬剤師)
- 製薬企業(研究部門、臨床開発部門)
- 各種研究機関
- 医薬品医療機器総合機構(PMDA)等
- 大学教員
- 公務員、博士研究員

薬科学専攻(修士課程)修了者の進路

- 製薬企業の研究職
- 化学/食品企業等の研究職
- 博士課程への進学

ティーチング・アシスタント

博士課程の学生は、自分の研究や論文発表の傍ら、「ティーチング・アシスタント」としても活躍しています。研究室に所属する4~6年生の卒業研究をサポートし、学生の実習教育を補助するなど、学部教育の充実に寄与しています。

昭和薬科大学の 研究力

独自研究のほか学際的な共同研究を展開

先端研究に取り組む専門研究室が若手研究者を育成

本学には化学薬学, 物理薬学, 生物薬学, 衛生薬学, 医療薬学, 社会薬学、各系統の研究室があり研究・教育の両面で相互に密接に連携しながら若手研究者の育成にも努めています。

さらに、実習科目・履修科目の充実を目的とした教育研究センター、薬学教育推進センターのほか教育研究のための各種施設を運営・管理する教育研究支援センターを配置

学生は4年次から研究室に所属し、卒業実習教育に取り組めます。



化学薬学系

薬化学研究室
薬品化学研究室
医薬分子化学研究室
生薬・天然物化学研究室



物理薬学系

薬品物理化学研究室
薬品分析化学研究室



生物薬学系

生化学研究室
微生物学研究室



衛生薬学系

衛生化学研究室



医療薬学系

薬剤学研究室
薬物動態学研究室
薬物治療学研究室
薬理学研究室



社会薬学系

社会薬学研究室
公衆衛生学研究室



臨床薬学教育研究センター

実践薬学部門
応用薬物治療部門
医薬品情報部門
地域医療部門



総合薬学教育研究センター

応用数学研究室
数理科学研究室
英語文化研究室
英語研究室
臨床心理学研究室



薬学教育推進センター

統合薬学教育研究室
薬学教育推進研究室



教育研究支援センター

薬用植物資源研究室



地域連携センター

薬化学研究室

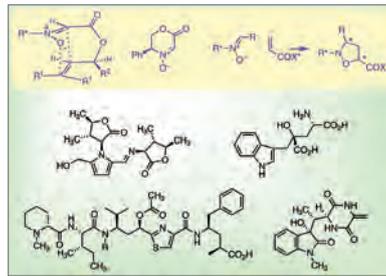
森田延嘉／准教授 橋本善光／講師

有機合成を武器に薬の素をつくる

医薬品の多くは有機化合物です。私たちは、有機化合物を自在に合成するための技術として新規な付加環化反応や新規な触媒反応を開発しています。

合成手法は、医薬品のシーズとなる複雑な天然有機化合物の合成で試されます。

開発した反応や合成した化合物を、医薬品の創製に役立てることを目的としています。



研究テーマ

- 1 新規付加環化反応の開発
- 2 合成による医薬品シーズの探索
- 3 新規な触媒反応の開発および生物活性物質の合成

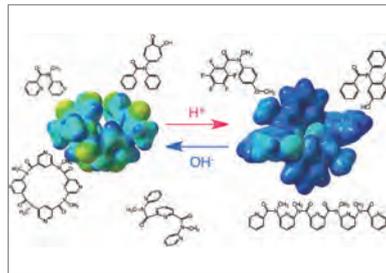
薬品化学研究室

岡本 巖／教授 山崎 龍／准教授 伊藤 愛／講師

創薬研究を指向した分子の構造化学

ある薬の開発研究中に、分子に炭素を一つ加えただけで全く効かなくなったことがありました。分子の形がそれまでとはまるで違う形に変わってしまったためです。

このような構造変換が、周りの環境に合わせて起こる、そんな新しいアミド化合物を創っています。



研究テーマ

- 1 環境応答による機能制御を指向した新規芳香族アミドの創製
- 2 触媒を使ったアミド化合物ならびに類似化合物の変換反応開発
- 3 らせん型キラリティを発現する新規分子の創製と制御

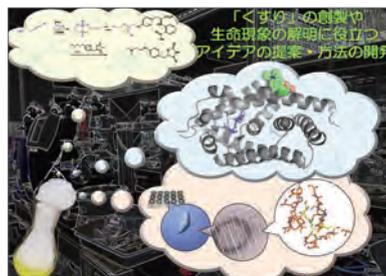
医薬分子化学研究室

伊藤俊将／教授 石田寛明／講師 大橋南美／講師

理論に基づいて新薬をつくる

くすりの多くは受容体や酵素などのタンパク質に結合して、効力を発揮します。私たちは、効力発揮のメカニズムを解明するために、くすりタンパク質の相互作用（分子認識）を原子レベルで明らかにする研究に取り組んでいます。

また、これらの研究成果を生かし、タンパク質のポケット構造に基づいて難病治療薬やメタボリックシンドローム関連疾患治療薬を創製することをめざしています。



研究テーマ

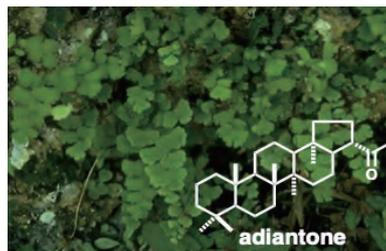
- 1 核内受容体のリガンド探索と機能解析
- 2 メタボリックシンドローム関連疾患治療薬の設計と合成
- 3 プロローブ分子を用いた遺伝子発現機構の構造生物学的研究
- 4 複素環化合物の合成と反応
- 5 受容体と相互作用するペプチドの合成

生薬・天然物化学研究室

中根孝久／教授 酒井佑宜／講師 篠崎淳一／講師

天然から未知の化合物を発見する

私たちは植物から未知の化合物を探し出し、“化学構造を明らかにする”、“生合成遺伝子（化合物の設計図）の機能を解明する”研究を行っています。これら化合物は新しい医薬品の候補化合物となる可能性を秘めており、生体内で化合物を作る仕組み（遺伝子の機能）を解明する生合成研究は医薬品開発の応用につながると期待されています。また、漢方薬の原料となる生薬の国内栽培化及び品質管理に関する研究も行っています。



研究テーマ

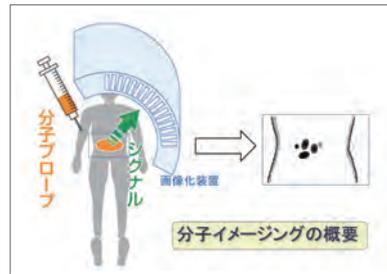
- 1 シダ植物や顕花植物のトリテルペノイドに関する研究
- 2 テルペノイドの生合成研究
- 3 生薬基原植物の国内における栽培最適化及び品質管理に関する研究
- 4 国内外の薬用資源植物から生物活性を有する新規化合物の探索研究
- 5 漢方薬に含まれる有用化合物に関する研究

薬品物理化学研究室

秋澤宏行／教授 宿里充穂／講師 尾江 悟／助教

病気の原因をイメージングする

「病気の原因は何で、体のどこにあるのか」という情報は、治療を行う上でとても大切です。このような情報を、一目で分かるように画像として表すことができる「分子イメージング」という技術があります。この技術では、「分子プローブ」というものを患者さんに投与し、その信号を検出して画像を得ます。当研究室では、この分子プローブの開発を通じて、医療への貢献を目指しています。



研究テーマ

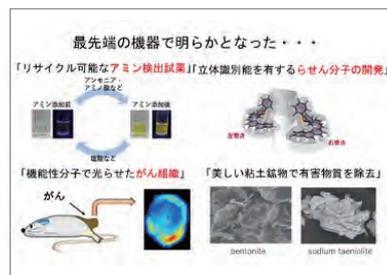
- 1 がんイメージングのための新しい分子プローブの開発
- 2 分子プローブの体内動態制御法の開発
- 3 精神・神経疾患の画像診断のための分子プローブの開発
- 4 脳内分子のイメージングによる疾患メカニズムの解析
- 5 ホウ素中性子捕捉療法を目的としたホウ素含有薬剤の開発

薬品分析化学研究室

唐澤 悟／教授 白井一晃／准教授 鈴木憲子／講師

最先端の機器を使って、「疾病」、「環境」、「特異な分子」を分析する

「がん」をはじめとする様々な疾病の早期発見は多くの人の願いです。その実現のためには、疾患の患部へ集まる「仕組み」や「薬」の開発、集まったことや治療できたことを確かめる分析機器が必要となります。当研究室では、薬学に関連する「がん」などの疾病の発見や治療を目指した研究、ダイオキシンや放射線などの環境中の有害物質が分析できる無機材料や有機分子の開発、らせん空間を活かした機能性分子の創薬研究を行っています。



研究テーマ

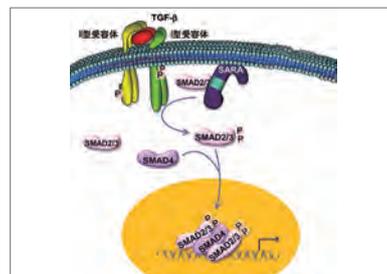
- 1 がんを光らせるMRI造影剤や蛍光物質の開発
- 2 温度や光などの外部刺激に応答するスマート分子の開発
- 3 らせん空間を活かした高度立体識別能を有する機能性分子の創製研究
- 4 無機材料の合成と物性などの基礎研究および医療・環境分野への応用研究
- 5 環境調和型アミン検出試薬の開発
- 6 生体分子のホモキラリティの解明

生化学研究室

伊東 進／教授 田代 悦／准教授 中野なおこ／講師

遺伝子変異により生じる疾患の分子メカニズムを探求する

遺伝子に変異が生じ、タンパク質の動きが正常でなくなることにより、私達は様々な病気に罹患します。これらの病気の中で私達は、がんの発症や心血管系疾患がどのようにして起こるのかについて研究しています。特に、細胞増殖や細胞分化を制御し、細胞死を誘導することが知られている Transforming Growth Factor- β (TGF- β) シグナルに着目し、TGF- β シグナル伝達の異常により生じる疾患の分子メカニズムについての解明を行っています。



研究テーマ

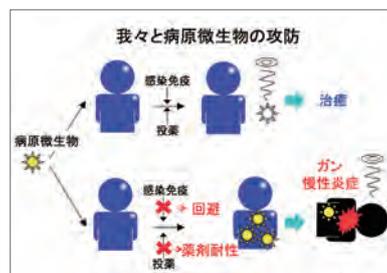
- 1 TGF- β シグナル伝達を解明する
- 2 TGF- β シグナル伝達異常により生じる病気（特にがんと心血管系疾患）の分子メカニズムを培養細胞や遺伝子改変動物を用いて解明する
- 3 TGF- β シグナル関連分子を標的とした抗ガン剤開発

微生物学研究室

金本大成／教授 浅井大輔／准教授 梶川瑞穂／講師

感染症の発症機構を様々な手法にて解明し、新しい治療戦略を提案する

私たちは、体内に侵入した病原微生物を自分自身の免疫あるいは外からの薬物によって排除し、健康を維持しています。しかし、微生物も生き残りを掛けて免疫回避や薬剤耐性の能力を獲得してきました。現在、そのような微生物が私たちにとって大きな脅威となっています。それらの病原微生物への対抗手段を探索するため、私たちの研究室では微生物の病原機構の解明を行っています。



研究テーマ

- 1 細菌の薬剤耐性機構の解析
- 2 多剤耐性菌に有効な抗菌物質の探索
- 3 病原微生物による免疫回避機構の解析
- 4 感染免疫の分子機構の解明
- 5 新規抗微生物薬とその送達手法の開発

衛生化学研究室

石井 功/教授 赤星軌征/准教授 鎌田祥太郎/助教

生命現象と環境を化学的に理解し、疾病から身を衛る

人間は与えられた環境の中で生まれ育ち、それぞれの環境に適応しつつ生きています。しかし、生来備わるその優れた適応機構もあらゆる環境に対応できるわけではありません。例えば、長い人類史上初めて飽食の時代を経験する我々の前には、高血圧・高脂血症・高血糖など栄養摂取過剰による病態が立ちはだかっています。また、健康になるために摂る医薬品や普通に存在する環境中物質も、時として身体に害をなすことがあります。我々は生命と環境の理解を通して、疾病から身を衛ることを目指しています。



研究テーマ

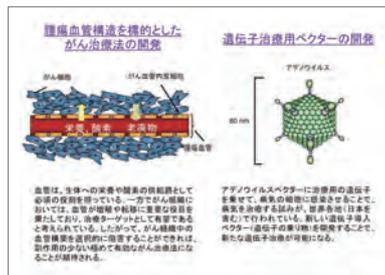
- 1 栄養素（アミノ酸・糖・脂質）代謝連関とその破綻による病態
- 2 生体内硫黄転移反応・超硫黄分子の生理的意義
- 3 心血管病発症危険因子ホモシステインの作用機序
- 4 非アルコール性脂肪性肝疾患治療薬としてのPPAR作用薬の検討
- 5 環境毒性化学物質や医薬品に対する生体防御機構
- 6 微量必須元素セレンの作用機序

薬剤学研究室

小泉直也/准教授 野村鉄也/講師 萩原芙美子/特任助教

生物機能を利用した新規治療法の開発を目指して

薬物を目的の場所へ、必要な時間、必要な量、送達させるシステム(Drug Delivery System: DDS)の開発を行っています。例えば、一般的な抗悪性腫瘍薬は、がん以外の正常部位にも到達するため、副作用を発現します。そこで、がん組織にのみ抗悪性腫瘍薬を選択的に送達させる方法を研究しています。特に、当研究室では、免疫機構を利用したり、ウイルスの特徴的な機能タンパク質を利用したりと、生物の機能を上手く利用した副作用が低い新しいがん治療法の開発に取り組んでいます。



研究テーマ

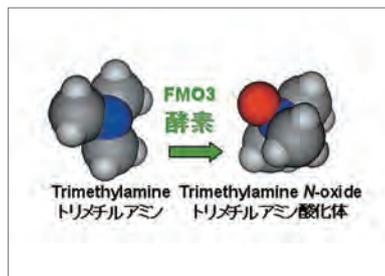
- 1 がんワクチン製剤の開発
- 2 がんターゲティング療法の開発
- 3 新しい遺伝子導入方法の開発
- 4 次世代高分子医薬品の効率的細胞内送達システムの研究
- 5 ウイルスの機能タンパク質を用いた新規DDSの開発
- 6 機能性生理活性タンパク質を用いた新規免疫制御薬の開発

薬物動態学研究室

山崎浩史/教授 清水万紀子/准教授 村山典恵/講師 安達昂一郎/特任助教

薬物の生体内の運命から有効性と安全性を知る

ヒトの疾病を診断、予防および治療する医薬品は、確かな薬効と安全性が確保されなければなりません。薬物が体内に入った後の運命は、個々の患者さんの病態、体質、酵素作用ならびに併用する薬の影響で著しく変動します。薬物動態学は、薬の生体への吸収、全身への分布、構造の変化(代謝)および体外への排泄を正しく把握し、患者さん毎の医療の基礎を研究する分野です。実験動物とヒトの薬物代謝の類似性・相違性を明らかにし、創薬研究における実験動物の有用性も検討します。



研究テーマ

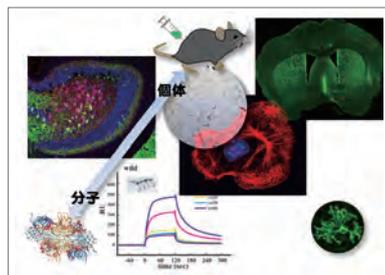
- 1 薬物酸化酵素活性の遺伝的多型
- 2 チトクロムP450やフラビン含有モノオキシゲナーゼの構造と機能
- 3 実験動物や霊長類の薬物代謝特性解析
- 4 簡便で迅速な、意味のある遺伝子変異の診断法の開発
- 5 薬物血中モニタリングによる個別化医療の基礎研究
- 6 生理学的薬物動態モデルを活用する化学物質の体内動態評価

薬物治療学研究室

水谷顕洋/教授 濱田浩一/講師 松田真悟/講師 水野郁美/特任助教

・細胞内Ca²⁺・細胞間隙HCO₃⁻の調節異常から読み解く疾病・恐怖記憶 — その消去の方法論 —

Ca²⁺、HCO₃⁻はいずれもありふれたイオンですが、細胞内の情報伝達システムや細胞内外のpH環境維持にとって非常に重要なイオンです。私たちは、この2つのイオン濃度調節に関与する"IRBITファミリー"とその相互作用分子に注目して研究しています。IRBITファミリーのノックアウトマウスが示す"症状"とその発症メカニズムを探ることで、疾病に対する新しい予防・治療戦略を探索しています。また、脳局所への薬剤投与とoptogeneticsを施したマウス行動実験解析手法を駆使した恐怖記憶の消去メカニズムの解明をとおして、恐怖関連疾患の治療方法確立も目指しています。



研究テーマ

- 1 IRBITファミリーによる細胞内のカルシウムおよびpH調節機構について
- 2 1を基礎とした脂肪細胞分化機構解明
- 3 1を基礎とした細胞形態の調節機構解明
- 4 呼吸中枢を形成する神経細胞群の発達について
- 5 恐怖記憶の確立と消去に関わるシグナル分子について

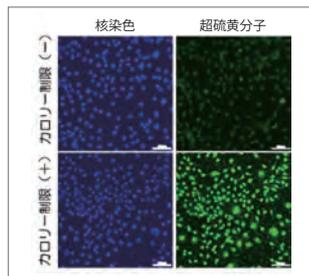
薬理学研究室

渡邊泰男／教授 土屋幸弘／准教授 神戸敏江／講師 尹盛炫／特任助教

健康を分子レベルで読み解く

体外では有毒なガス(一酸化窒素、硫化水素)の体内での役割に興味を持っています。人生 100 歳時代プロジェクトとして、健康長寿を支える薬を見つけたいと思っています。長寿の鍵とされる「カロリー制限」は、硫化水素前駆体「超硫黄分子」の産生を伴います(図)。そこで、体内では長寿に関連する「一酸化窒素」「超硫黄分子」の作用を解明し、色々な細胞を用いて加齢との上手な付き合い方を考えています。

培養細胞で、カロリー制限を模倣すると(下図)細胞数は変わらず(左図)、「超硫黄分子」が産生されます(右下)。



研究テーマ

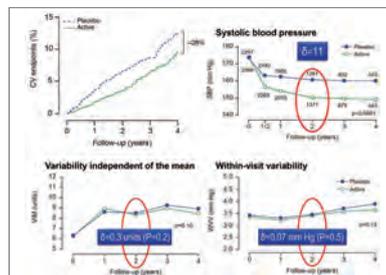
- 1 カロリー制限模倣薬の開発 (細胞老化制御を目指して)
 - ・血管内皮機能 (血管老化予防を目指して)
 - ・線維芽細胞の創傷治癒機能 (肌老化予防を目指して)
 - ・がん細胞の増殖制御 (がん増殖抑制を目指して)
- 2 運動模倣薬の開発 (寝たきり予防を目指して)
- 3 微生物成分による免疫応答 (免疫老化予防を目指して)

社会薬学研究室

原梓／教授

データを活用して、社会と人々の健康維持に貢献

近年、高齢化に伴い、がん、生活習慣病、認知症患者の増加など様々な問題を抱える中で、我々は、地域住民データや、医療ビッグデータを用いて、疾病や健康事象、医薬品の使用実態や安全性に関して科学的に検討しています。また、科学技術の成果を社会の利益に適用するように調整するレギュラトリーサイエンスの視点に立ち、法規制等について分析・評価することにより、問題解決に貢献しています。



研究テーマ

- 1 生活習慣病、がん、認知症の予防に関する疫学・臨床研究
- 2 医薬品の使用実態や安全性に関する薬剤学研究
- 3 法律や制度の施行・変更に関連した分析・評価

公衆衛生学研究室

庄野あい子／准教授

みんなの健康を考える

公衆衛生は疾患の予防や健康の保持増進のための取り組みを考える領域です。薬学では「くすり」を中心に学びますが、病気にならないようにすること(予防)や病気の早期発見・早期治療も薬学の範疇です。新型コロナウイルス感染症の出現以降、感染症予防をはじめとする公衆衛生の重要性が増えています。健康に過ごすために薬剤師ができることを考えます。



研究テーマ

- 1 ワクチン接種に関する分析・研究
- 2 疾患の早期発見・早期治療の取り組みに関する研究
- 3 法律や制度の導入・変更による影響に関する分析・評価
- 4 外国における薬剤師の役割

臨床薬学教育研究センター

センター長：廣原正宜／教授

臨床薬学の教育研究に関する支援、とくに5年次に実施する「病院・薬局実務実習」と3年次後期から始まる事前実習のサポートを中心として、臨床薬学に関わる実習科目の充実にも取り組んでいます。

- 実践薬学部門
廣原正宜／教授 渡部一宏／教授 神林 弾／講師 廣澤伊織／講師 森元能仁／講師 山本 健／講師
- 医薬品情報部門
長南謙一／教授 土肥弘久／准教授 大和幹枝／助教
- 地域医療部門
菊池千草／教授 梶 江里香／助教
- 応用薬物治療部門
濱本知之／教授 増田 豊／教授 高木彰紀／講師



総合薬学教育研究センター

センター長：鈴木英明／教授

- 英語文化研究室
鈴木英明／教授
- 英語研究室
花角聡美／講師
- 応用数学研究室
繁田岳美／教授
- 数理科学研究室
瀧澤 誠／講師
- 臨床心理学研究室
吉永真理／教授



薬学教育推進センター

センター長：岸本成史／教授

- 統合薬学教育研究室
井上能博／教授
池野聡一／准教授
小池 猛／講師
- 薬学教育推進研究室
岸本成史／教授
- 川幡正俊／准教授
中里朱根／講師
- 長谷川仁美／講師



教育研究支援センター

薬用植物資源研究室では、薬用植物を研究対象として、人類が将来も貴重な資源を継続的に有効活用できることを目指してさまざまな基礎的研究を行っています。

- 薬用植物資源研究室
高野昭人／教授
- 機器分析研究施設
清谷多美子／助教
- 図書館
- RI研究施設
- 実験動物研究施設



地域連携センター

センター長：吉永真理／教授

2020年4月に地域連携センターが設立され、さまざまな活動に取り組んでいます。

主な活動は町田市役所子ども生活部・町田市薬剤師会と連携したお薬相談カフェ（学内開催）や薬剤師と心理士が市内の子育て相談センターでお薬相談おしゃべり会に参加するアウトリーチ活動、さがまちコンソーシアムにおいてカレッジ講座の開催（実験講座、市民向け講座）、学生と地域活動のマッチング会・報告会、地域教育連携プラットフォーム事業等があります。学生と教職員で地域貢献活動の領域を広げています。



令和6年度 大学院薬学研究科薬科学専攻修士課程 分野別研究テーマ

	分野	研究指導教員	研究室・部門	研究テーマ
基盤薬科学	薬品物理化学	教授 秋澤宏行	薬品物理化学	①がんの質的診断を目的とした分子プローブの開発 ②分子イメージングによる炎症性疾患の病態解析
	反応有機化学	准教授 森田延嘉	薬化学	①金触媒を用いる新規反応の開発と天然物合成への応用 ②金触媒等を用いる環状化合物の合成とその蛍光特性に関する研究
	感染免疫学	准教授 浅井大輔	微生物学	①遺伝子編集による細菌病原性の制御 ②生物化学工学によるペプチド性抗微生物薬の開発 ③ウイルスによる免疫回避の分子メカニズム
	分子薬理学	准教授 土屋幸弘	薬理学	①超硫黄分子および一酸化窒素による翻訳後修飾とその細胞内シグナル伝達への影響 ②超硫黄分子を含む天然物の探索 ③天然物を対象としたCa2+シグナル調節物質の探索
	薬品作用学	教授 増田 豊	応用薬物治療	①ガン細胞に対するアポトーシス誘導物質の探索 ②ガン細胞におけるアポトーシス誘導機構の解明 ③膵臓がん治療に関わる分子機構の解析
	環境健康科学	准教授 赤星軌征	衛生化学	①生理活性低分子(アミノ酸・ガス・脂質・薬品・毒物)の作用機序 ②代謝(糖・アミノ酸・脂質)連関と代謝リモデリング ③上記の連関する動物行動
	分子細胞生物学	准教授 田代 悦	生化学	①TGF-βシグナル伝達制御機構 ②YAPシグナル伝達制御機構 ③TGF-βシグナルによる腸上皮細胞分化・消化管がん制御 ④制がん剤耐性獲得における上皮間葉転換制御機構
	公衆衛生学	教授 岸本成史	薬学教育推進	①公衆衛生に貢献する薬剤師の養成に関する研究 ②薬剤師のメンタルヘルスリテラシーの向上に関する研究
	心の健康科学	教授 吉永真理	臨床心理学	①子ども・若者のメンタルヘルス向上に関する研究 ②孤独・孤立化を防ぐ心の健康プログラムの開発と実践
創薬科学	分析化学	教授 唐澤 悟	薬品分析化学	①ガドリニウム代替造影剤の開発 ②長波長発光分子の開発 ③がんイメージングプローブの開発
	薬用植物資源学	(未定)	薬用植物資源	
	天然物化学	教授 中根孝久	生薬・天然物化学	①シダ植物や顕花植物のトリテルペノイドに関する研究 ②テルペノイドの生合成研究 ③国内外の薬用資源植物から生物活性を有する新規化合物の探索研究 ④生薬基原植物の国内における栽培最適化及び品質評価に関する研究
	医薬分子設計学	教授 伊藤俊将	医薬分子化学	①核内受容体リガンドの創薬研究 ②構造生物学的手法によるリガンドと標的分子の相互作用様式の解明
	医薬品合成化学	准教授 山崎 龍	薬品化学	①分子構造・分子配列の制御に関する研究 ②アミド結合類縁体の合成、構造、機能発現に関する研究
	薬物動態学	准教授 清水万紀子	薬物動態学	①薬物の生体中濃度の個人差と代謝酵素の遺伝子多型 ②代謝酵素を介する相互作用研究
	薬物送達学	准教授 小泉直也	薬剤学	①ウイルス感染を標的とした創薬研究 ②ウイルスタンパク質を利用した新規DDSの構築
	薬効解析学	教授 水谷顕洋	薬物治療学	①細胞内Ca2+作動性orphan GPCRのスクリーニング。 ②当大学が有する低分子化合物ライブラリーから細胞内Ca2+作動性に影響を与える化合物をスクリーニングする。
	医薬品評価学	教授 渡部一宏	実践薬学	①院内製剤に関する製剤研究及び臨床研究 ②患者アウトカム評価に関する臨床研究(主にがん領域)
	公衆衛生学	准教授 庄野あい子	公衆衛生学	①疾病予防や重症化予防に関する研究 ②制度の導入や変更による影響に関する研究
社会薬学	教授 原 梓	社会薬学	①疾病予防に関する疫学研究 ②医薬品の使用実態、安全性、有効性に関する薬剤疫学研究	

令和6年度 大学院薬学研究科薬学専攻博士課程 分野別研究テーマ

分野	研究指導 教員	研究室 ・部門	研究テーマ
メディシナル ケミストリー	教授 伊藤俊将	医薬分子 化学	①核内受容体リガンドの開発研究 ②構造生物学的研究によるリガンドとタンパク質の相互作用解析 ③酵素阻害剤の開発研究④タンパク質をコバレント修飾する化合物の開発研究
医薬品有機 化学	准教授 森田延嘉	薬化学	①金触媒などを用いる新規反応の開発 ②新規付加環化反応の開発 ③量子化学計算による反応機構解析
	教授 岡本 巖	薬品化学	①環境応答による動的機能制御を指向した新規芳香族アミドの創製 ②新規アミド誘導体の構造特性と反応性 ③新規芳香族化合物による特異的空間の創出
医薬品物性学	教授 秋澤宏行	薬品物理 化学	①in vivoイメージングのための分子プローブの開発 ②分子イメージングを活用した病態解析
	教授 井上能仁	統合薬学 教育	①抗菌活性を示す植物由来の新規成分の探索と作用機序の解明 ②環境低負荷な抗菌材料の開発と作用機序の解明
	教授 唐澤 悟	薬品分析 化学	①次世代型刺激応答性イメージングプローブの開発 ②多環式芳香族を使った多機能性分子の開発 ③機能性生体関連物質と分析試薬の開発 ④治療と診断可能な光増感剤の開発
環境健康科学	教授 石井 功	衛生化学	①生理活性低分子(アミノ酸・ガス・脂質・医薬品・毒物)の作用機序 ②代謝(糖・アミノ酸・脂質)関連リモデリング ③先天性代謝異常症・生活習慣病動物モデル
	教授 岸本成史	薬学教育 推進	①公衆衛生に貢献する薬剤師の養成に関する研究 ②薬剤師のメンタルヘルスリテラシーの向上に関する研究
	教授 吉永真理	臨床心理 学	①薬局薬剤師による健康的なコミュニティづくりに関する研究 ②薬物乱用防止教育プログラムの開発と効果検証 ③環境と子どもの健康・発達
	准教授 庄野あい子	公衆衛生 学	①疾病予防や重症化予防に関する研究 ②制度の導入や変更による影響に関する研究
分子細胞 生物学	教授 伊東 進	生化学	①TGF- β シグナル伝達制御機構 ②YAPシグナル伝達制御機構 ③TGF- β シグナルによる腸上皮細胞分化・消化管がん制御 ④制がん剤耐性獲得における上皮間葉転換制御機構
	教授 金本大成	微生物学	①細菌の薬剤耐性機構に関する研究 ②遺伝子編集による細菌病原性の制御 ③生物化学工学によるペプチド性抗微生物薬の開発 ④ウイルスによる免疫回避の分子メカニズム
	教授 増田 豊	応用薬物 治療	①ガン細胞に対するアポトーシス誘導物質の探索 ②ガン細胞におけるアポトーシス誘導機構の解明 ③臓器がん治療に関わる分子機構の解析
漢方・ 医薬資源学	(未定)	薬用植物 資源	
	教授 中根孝久	生薬・天 然物化学	①シダ植物や顕花植物のトリテルペノイドに関する研究 ②テルペノイドの生合成研究 ③国内外の薬用資源植物から生物活性を有する新規化合物の探索研究 ④生薬基原植物の国内における栽培最適化及び品質評価に関する研究
病態解析・ 薬物治療学	教授 水谷顕洋	薬物治療 学	①脂肪細胞分化におけるIRBIT分子の機能について ②脳脊髄液及び脳間質液のpH調節機構が高次脳機能に及ぼす影響について ③細胞質mRNA結合蛋白質の神経系及び血球系の分化における機能について ④恐怖記憶の消去メカニズムとその性差について

令和6年度 大学院薬学研究科薬学専攻博士課程 分野別研究テーマ

分野	研究指導 教員	研究室 ・部門	研究テーマ
薬理・医薬品 安全性学	教授 渡邊泰男	薬理学	①超硫黄分子によるカルシウムシグナル分子のレドックス応答性とその意義 ②免疫老化におけるイオウ転移酵素のレドックス応答性とその意義 ③カルシウムシグナル／超硫黄分子による骨格筋分化促進とその分子機構 ④ガス状伝達物質の新しい情報伝達系
	(未定)	薬剤学	
薬剤・薬物動態学	教授 山崎浩史	薬物動態学	①薬物酸化酵素活性の個人差に関する薬理遺伝学的研究 ②変異型酸素添加酵素の構造と機能に関する研究 ③創薬を指向した新規ヒト型モデル動物の開発と評価 ④環境化学物質の生体内運命、代謝的活性化・不活性化と生体に及ぼす影響に関する研究
	教授 菊池千草	地域医療	①服薬アドヒアランスの研究 ②一般用医薬品(OTC)に関する研究 ③地域住民の健康維持増進に関する研究
医薬情報解析 ・医薬品評価学	(未定)	応用薬物 治療	
	教授 渡部一宏	実践薬学	①院内製剤に関する製剤研究及び臨床研究 ②患者アウトカム評価に関する臨床研究(主にがん領域)
	教授 原 梓	社会薬学	①疾病予防に関する疫学研究 ②医薬品の使用実態、安全性、有効性に関する薬剤疫学研究

学費 入学金:300,000円

※ 本学薬学部卒業生及び大学院修士課程修了者には入学金を免除します。
※ 社会情勢の変化により、入学金及び学生納付金等について金額を変更する場合があります。

修士課程

学 年	第1年次		第2年次	
	前期	後期	前期	後期
授業料	250,000	250,000	250,000	250,000
学生教育研究災害障害保険料	1,790	—	—	—
学生教育研究賠償責任保険料	680	—	—	—
厚生福社会費	30,000	—	30,000	—
合計	282,470	250,000	280,000	250,000

博士課程

学 年	第1年次		第2～4年次	
	前期	後期	前期	後期
授業料	250,000	250,000	250,000	250,000
学生教育研究災害障害保険料	3,370	—	—	—
学生教育研究賠償責任保険料	1,360	—	—	—
厚生福社会費	30,000	—	30,000	—
合計	284,730	250,000	280,000	250,000

大学院薬科学専攻修士課程 カリキュラムについて

1. アドミッション・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、 ディプロマ・ポリシー

1) アドミッション・ポリシー

本学の理念「薬を通して人類に貢献」に基づき、大学院薬学研究科薬科学専攻修士課程は、薬科学の高度な専門知識と技術を身に付け、それらを自ら運用することによって問題を解決し、科学の発展に国際的なレベルで貢献できる人材の養成を教育目標としている。
薬学のみならず広く科学を学んだ学生、社会人並びに留学生を主な対象とし、国内外から幅広く人材を募集する。

- ① 薬科学分野において真理探究への情熱と忍耐力を有する者
- ② 知的好奇心に富み、幅広い知識の習得に積極的に取り組む姿勢を有する者
- ③ 国際的な視野に立って自ら学び続ける熱意を有する者
- ④ 高い倫理観を有する者
- ⑤ 研究能力を高めるために自己研鑽を継続する意志を有する者
- ⑥ 社会に貢献しようとする意志を持つ者

2) カリキュラム・ポリシー

学生が、薬科学領域の研究遂行に必要な基礎知識・理解力・問題解決能力・情報発信力を身に付け、自立的に研究立案し遂行できる薬学研究者になれるように、以下の教育課程を編成する。

- ① 基盤薬科学及び創薬科学領域の基礎知識を修得できる科目を編成する。
- ② 先端薬科学研究及び医療の進歩に対応できる能力を培える科目を編成する。
- ③ 国内外の研究者との交流の機会を設け、国際的な視野に立つ薬科学者を養成できる科目を編成する。
- ④ 情報発信能力を修得できる科目を編成する。
- ⑤ 豊かな人間性と倫理観を醸成できる科目を編成する。

3) ディプロマ・ポリシー

所定の単位を修得し、学位論文審査に合格することが条件で、以下を満たしていること。

- ① 薬科学領域の研究遂行に必要な基礎知識・理解力・問題解決力・情報発信力を修得し、独自の考察が展開できる能力を有している。
- ② 国際的な視点から創薬を含める薬科学の諸問題に対応できる能力を有している。
- ③ 豊かな人間性と高い倫理観を修得している。

2. 薬科学専攻修士課程の教育課程及び履修方法

1) 授業科目及び単位数(本大学院学則第19条)

薬学専攻修士課程に設ける分野、授業科目及びその単位数は、表1のとおりである。

表1 薬科学専攻修士課程の授業科目及びその単位数

領域	授業科目	単位数
総合必修科目	外国語(1年次に履修)	0.5
	キャリアパス	1.5
	創薬科学ゼミナール1	2.0
	創薬科学ゼミナール2	2.0
基盤薬科学	物理化学特論及び演習	1.5
	反応有機化学特論及び演習	1.5
	感染免疫学特論及び演習	1.5
	分子薬理学特論及び演習	1.5
	薬品作用学特論及び演習	1.5
	環境毒性学特論及び演習	1.5
創薬科学	分子細胞生物学特論及び演習	1.5
	分析化学特論及び演習	1.5
	天然物化学特論及び演習	1.5
	医薬分子設計学特論及び演習	1.5
	医薬品合成化学特論及び演習	1.5
	薬物動態学特論及び演習	1.5
	創剤学特論及び演習	1.5
	薬効解析学特論及び演習	1.5
医薬品安全性学特論及び演習	1.5	
特別研究		18

2) 履修方法(本大学院学則第23条)

薬科学専攻修士課程においては2年以上在学し、第19条3項に表示した授業科目のうち、指導教員の指導に従い、特論及び演習講義12単位、特別研究18単位合計30単位以上を修得し、必要な研究指導を受けて修士論文を提出し、最終試験を受けるものとする。

3) 修士課程の修了要件(本大学院学則第28～29条)

・修士課程の修了は、本学大学院学則第28～29条の他、第23条に定めた要件を満たし、学位論文の審査並びに最終試験に合格した者について、大学院研究科委員会の議を経てこれを認定する。

・薬科学専攻修士課程の修了を認定された者に対して、修士(薬科学)の学位を授与する。

大学院薬学専攻博士課程(4年制) カリキュラムについて

1. アドミッション・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、 ディプロマ・ポリシー

1) アドミッション・ポリシー

本学の理念「薬を通して人類に貢献」に基づき、大学院薬学研究科薬学専攻博士課程は、高度な総合的薬学専門知識を身に付け、先端薬学の基礎及び応用研究を通して、自らが意欲的かつ創造性豊かに研究を遂行し、国際的なレベルで医療薬学の発展に寄与できる人材の育成を教育目標としている。薬学のみならず広く科学を学んだ学生、社会人並びに留学生を主な対象とし、国内外から幅広く以下の人材を募集する。

- ① 基礎薬学並びに臨床薬学領域において真理探究への情熱と忍耐力を有する者
- ② 知的好奇心に富み、幅広い知識の習得に積極的に取り組む柔軟な姿勢を有する者
- ③ 国際的な視野に立ち、自ら学び、研究能力を高める熱意を有する者
- ④ 高い倫理観を有し、研究能力を高めるための自己研鑽を継続する意志を有する者
- ⑤ 社会に貢献しようとする意志を持つ者

2) カリキュラム・ポリシー

学生が、医療薬学を専門とした分野で高度な知識と技能を修得し、国際的に活躍できる独立した研究者として研究を立案・遂行し、次世代を育て、指導できるようになるために、以下の教育課程を編成する。

- ① 基礎及び臨床にわたる薬学を体系的に学習し、先端医療薬学及び医療の進歩に対応できる能力を培える科目を編成する。
- ② 国内外の研究者との交流の機会を設け、国際的な視野に立つ薬学研究者を養成できる科目を編成する。
- ③ 研究成果を国際社会に発信する能力を修得できる科目を編成する。
- ④ 豊かな人間性と倫理観を修得できる科目を編成する。
- ⑤ 基礎薬科学、医療・応用薬学及び臨床医学のカリキュラムを統合的に学修し、薬学研究者に必要な先端の薬学専門知識を修得できる科目を編成する。

3) ディプロマ・ポリシー

所定の単位を修得し、学位論文審査に合格することが条件で、以下を満たしていること。

- ① 薬学を専門とする分野で高度な知識と技能を修得し、国際的に活躍できる独立した研究者として研究を立案・遂行し、次世代の研究者を指導できる能力を有している。
- ② 科学と医療の諸問題に国際的な視点から対応できる能力を有している。
- ③ 研究成果を国際社会に発信する能力を修得している。
- ④ 豊かな人間性と高い倫理観を修得している。

- ⑤ 学位論文の基となる研究について、第一著者として審査制度のある英文原著論文が公表又は受理されている。

2. 薬学専攻博士課程(4年制)の教育課程及び履修方法

1) 授業科目及び単位数(本大学院学則第19条)

薬学専攻博士課程(4年制)に設ける分野、授業科目及びその単位数は、表1のとおりである。

表1 薬学専攻博士課程(4年制)の授業科目及びその単位数

領域	授業科目	単位数
総合必修科目	先端薬学(生命科学と疾患)特論	1.5
	キャリアパス	1.5
	医療薬学ゼミナール1	2.0
	医療薬学ゼミナール2	2.0
	医療薬学ゼミナール3	2.0
専門選択科目	A メディカルケミストリー・生物有機化学特論及び演習	1.0
	A 医薬品・生体分子分析学特論及び演習	1.0
	A 漢方・医薬資源学特論及び演習	1.0
	B 病態解析・薬物治療学特論及び演習	1.0
	B 薬剤・薬物動態学特論及び演習	1.0
	B 臨床薬学特論及び演習	1.0
	C 薬理・医薬品安全性学特論及び演習	1.0
	C 分子細胞生物学特論及び演習	1.0
	C 環境健康科学特論及び演習	1.0
	D 応用腫瘍治療学特論及び演習	3.0
	D 感染症制御学特論及び演習	3.0
	D 地域医療学特論及び演習	3.0
特別研究		18.0

2) 履修方法(本大学院学則第20条)

薬学専攻博士課程においては4年以上在学し、第19条に表示した授業科目のうち、研究指導教員(以下「指導教員」という。)の指導に従い、総合必修科目及び専門選択科目(特論及び演習)を合わせて12単位、特別研究18単位合計30単位以上を修得し、指導教員の指導を受け研究活動を行い、博士論文を提出し、最終試験を受けるものとする。

専門選択科目の選択方法は、A,B,Cグループから各1科目の計3科目履修ものとする。ただし、臨床センター所属大学院生は、Dグループから1科目だけ履修するものとする。社会人大学院生は、所属に関わらず、A,B,Cグループから各1科目の計3科目、もしくは、Dグループから1科目のどちらかを入学時に選択し、履修するものとする。

(参考) 令和6年度 大学院薬学研究科薬科学専攻修士課程 授業科目と担当教員

	授業科目	担当教員(○印は科目責任者)
総合必修科目	外国語	○研究科長 非常勤講師 Jonathan Snell
	キャリアパス	○研究科長 教授 吉永 真理 准教授 庄野あい子 非常勤講師 高見正道
	創薬科学ゼミナール1	○所属研究室大学院指導教員
	創薬科学ゼミナール2	○所属研究室大学院指導教員
基盤薬科学	物理化学特論及び演習	○教授 秋澤宏行 講師 宿里充穂
	反応有機化学特論及び演習	○准教授 森田延嘉 講師 橋本善光
	感染免疫学特論及び演習	教授 金本大成 ○准教授 浅井大輔 講師 梶川瑞穂
	分子薬理学特論及び演習	教授 渡邊泰男 ○准教授 土屋幸弘
	薬品作用学特論及び演習	教授 岸本成史 ○教授 増田 豊
	環境毒性学特論及び演習	教授 石井 功 ○准教授 赤星軌征
	分子細胞生物学特論及び演習	教授 伊東 進 ○准教授 田代 悦
創薬科学	分析化学特論及び演習	○教授 唐澤 悟 准教授 臼井一晃
	天然物化学特論及び演習	教授 高野昭人 ○教授 中根孝久 講師 酒井佑宜 講師 篠崎淳一
	医薬分子設計学特論及び演習	○教授 伊藤俊将
	医薬品合成化学特論及び演習	教授 岡本 巖 ○准教授 山崎 龍 講師 伊藤 愛
	薬物動態学特論及び演習	教授 山崎浩史 ○准教授 清水万紀子 講師 村山典恵
	創剤学特論及び演習	○准教授 小泉直也 講師 野村鉄也
	薬効解析学特論及び演習	○教授 水谷顕洋
	医薬品安全性学特論及び演習	○教授 渡部一宏 教授 原 梓

(参考) 令和6年度 大学院薬学研究科薬学専攻博士課程 授業科目と担当教員

	授業科目	暗闘教員(○印は科目責任者)
総合 必修 科目	先端薬学 (生命科学と疾患)	教授 秋澤宏行 教授 石井 功 教授 伊東 進 教授 伊藤俊将 教授 岡本 巖 教授 金本大成 教授 唐澤 悟 教授 高野昭人 教授 中根孝久 教授 瀧本知之 ○教授 原 梓 教授 水谷顕洋 教授 山崎浩史 教授 吉永真理 教授 渡部一宏 教授 渡邊泰男
	キャリアパス	○研究科長 教授 吉永真理 准教授 庄野あい子 非常勤講師 高見正道
	医療薬学ゼミナール1	○所属研究室大学院指導教員
	医療薬学ゼミナール2	○所属研究室大学院指導教員
	医療薬学ゼミナール3	○所属研究室大学院指導教員
専門 選択 科目	メソナルケミストリー・生物有機 化学特論及び演習	○教授 岡本 巖 教授 伊藤俊将 准教授 森田延嘉
	医薬品・生体分子分析学 特論及び演習	○教授 秋澤宏行 教授 井上能博 教授 唐澤 悟 講師 宿里充穂
	漢方・医薬資源学特論 及び演習	○教授 高野昭人 教授 中根孝久 講師 酒井佑宜 講師 篠崎淳一
	病態解析・薬物治療学特論 及び演習	○教授 水谷顕洋
	薬剤・薬物動態学特論 及び演習	○教授 山崎浩史 准教授 小泉直也
	臨床薬学特論及び演習	○教授 瀧本知之 教授 廣原正宜 教授 渡部一宏
	薬理・医薬品安全性学特論 及び演習	○教授 渡邊泰男 准教授 土屋幸弘
	分子細胞生物学特論 及び演習	○教授 伊東 進 教授 金本大成 准教授 浅井大輔 准教授 田代 悦
	環境健康科学特論 及び演習	○教授 石井 功 教授 岸本成史 教授 吉永真理 准教授 赤星軌征
	応用腫瘍治療学特論 及び演習	○教授 瀧本知之 准教授 土肥弘久
	感染症制御学特論 及び演習	○教授 増田 豊 准教授 浅井大輔
	地域医療学特論及び演習	○教授 菊池千草



【お問い合わせ先】

〒194-8543

東京都町田市東玉川学園三丁目2番1号

教務課 大学院係

TEL:042-721-1518(直通) FAX:042-721-1588

E-mail:kyoumu@ad.shoyaku.ac.jp